

山国秀幸さん 介護や在宅医療を



前向きに伝える映画プロデューサー

朝日新聞（ひと）2019.8.9

介護施設で働く青年を主役にした映画「ケアニン」が記録的なヒットを続けている。といっても、有志団体などによる自主上映会で。劇場公開の後、2年弱の間に国内外1千カ所以上で自主上映されたこの作品を企画した。

「ケアニン」は「ケアする人間」の意味。「介護へのイメージが変わるような、愛着がわく言葉を作ったかったんです」

大阪府出身。小中学生のころは「映画少年」だった。ゲーム会社に在職中、映画とのタイアップ企画を手がけた。映画少年の血が騒ぎ、37歳で独立系映画会社へ。だが、ずっと映画をやってきた人たちには、かなわない。ビジネスとしても不安定だった。

「自分でやるしかない」。40歳でワンダーラボトリーを設立。「非劇場上映」という手法に出会った。自主上映会で「地域の人々の熱い思いを感じ、感動した」。

テーマに浮かび上がったのが介護だ。「見たい人」と「見せたい人」の双方がいるから。まず1年半ほど介護施設などを取材した。暗い物語にはしたくなかった。「認知症で人生終わりになんて、僕がさせない。」というキャッチコピーがそれを象徴している。

映像の余韻でなく、あえてセリフにメッセージを込める。「介護や医療を『自分事』として感じてほしい」。「ケアニン」の続編が来春にも封切りされる予定だ。

やまくにひでゆき（52歳）

（文・佐藤陽 写真・山本和生）